

気候系監視速報（2025年（令和7年）4月）

気候系の特徴（2025年4月）

- ・海面水温偏差は、太平洋赤道域の中部で負、西部と南米沖で正という3極構造が弱まりながらも持続した。NINO.3海域の基準値との差は+0.1°Cだった。インド洋は広く正偏差となった。
- ・平年と比べた対流活動は、海洋大陸周辺で活発、インド洋西部で不活発となり、西・中部太平洋熱帯域では、南半球側で活発、北半球側で不活発だった。
- ・対流圏上層では、東南アジアとオーストラリアで南北半球対の高気圧性循環偏差が卓越し、対流圏下層では、ベンガル湾とオーストラリア北部に低気圧性循環偏差が見られた。
- ・500hPa高度では、3分裂した極渦の主体はバレンツ海で、北欧とオホーツク海では顕著な正偏差となった。中緯度は概ね正偏差だが、東アジアや北大西洋東部は弱い負偏差となった。
- ・東アジアの亜熱帯ジェット気流は、中国西部で平年より北、日本付近で平年より南に蛇行した。日本付近の海面気圧は負偏差となり、黄海～日本海が気圧の谷となった。
- ・日本の平均気温は、北・東・西日本で高く、沖縄・奄美で低かった。北日本日本海側と太平洋側では、日照時間がかなり少なく、1946年以降4月として1位及び1位タイの寡照となり、降水量はかなり多かった。西日本日本海側と太平洋側では降水量がかなり少なかった。

日本の天候（図1～3、表1）

平均気温：北・東・西日本で高かった一方、沖縄・奄美で低かった。

降水量：北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多かった。一方、西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり少なく、東日本日本海側で少なかった。

日照時間：北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり少なく、東日本日本海側で少なかった。一方、西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。

天候経過：本州付近に暖かい空気が流れ込みやすかったため、月平均気温は北・東・西日本で高かった。一方、沖縄・奄美は上旬を中心に寒気の影響を受けた時期があり、低かった。低気圧が北日本付近を通過しやすく、北日本では曇りや雨の日が多かった。このため、北日本日本海側と北日本太平洋側では、月降水量はかなり多く、月間日照時間は1946年の統計開始以降、最も少なくなった（北日本太平洋側では2006年と同値）。一方、西日本中心に高気圧に覆われやすく、月降水量は西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり少なかった。

世界の天候

- ・世界の月平均気温偏差は+0.55°C（速報値）で、1891年の統計開始以降、4月として2番目に高い値となった。4月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.81°C/100年（速報値）である（図4）。
- ・主な異常天候発生地域は次のとおり（図5）。
 - 中国東部、東シベリア、インド～中央アジア～アラビア半島、ヨーロッパ、モーリシャス及びその周辺で異常高温となった。
 - シベリア、トルコ及びその周辺、オーストラリア東部で異常多雨、ヨーロッパ中部～西部で異常少雨となった。

海況（図6）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、南米沖で正偏差、日付変更線の西～中部で負偏差となった。NINO.3海域の月平均海面水温偏差及び基準値との差はともに+0.1°Cだった（図7）。
- ・北太平洋では、フィリピンの東海上～中部の亜熱帯や中緯度帯の日付変更線付近で顕著な正偏差、カリフォルニアの南西海上では顕著な負偏差となった。

- ・南太平洋では、中緯度帯の西部～中部で顕著な正偏差となった。
- ・インド洋熱帯域では、西部～インド周辺、南東部で顕著な正偏差となった。
- ・北大西洋では、西部の亜熱帯やヨーロッパの西海上で顕著な正偏差となった。
- ・南大西洋では、熱帯の西部で正偏差、東部で負偏差となった。

熱帯の対流活動と循環

- ・対流活動は、平年と比べてベンガル湾～インドネシア周辺、西・中部太平洋赤道域の南半球側、東部太平洋赤道域で活発、インド洋西・中部、西・中部太平洋赤道域～その北半球側で不活発だった（図8）。
- ・赤道季節内振動に伴う対流活発な位相の東進は不明瞭だった（図9）。
- ・対流圏上層では、インド洋東部～インドネシア周辺で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。中国南部から北東方向に波列状の偏差パターンが連なり、西日本周辺で低気圧性循環偏差、オホーツク海～日本の東海上で高気圧性循環偏差となった（図10）。
- ・対流圏下層では、西・中部太平洋熱帯域で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。
- ・海面気圧は、インド洋東部、西・中部太平洋熱帯域で正偏差、インド洋西部、オーストラリア北部沿岸周辺、東部太平洋赤道域で負偏差となった。南方振動指数は+0.5だった（図7）。

北半球の循環

- ・500hPa 高度（図11）より、高緯度では、分裂した極渦の主体はバレンツ海にあり、北欧とオホーツク海では正偏差となった。中緯度では、中央アジア、太平洋中部・東部、大西洋西部で正偏差となり、東アジア、大西洋東部、地中海東部で弱い負偏差となった。
- ・200hPa 風速（図12）より、偏西風は平年と比べて北米西部で強かった。亜熱帯ジェット気流は平年と比べてアフリカで強く、東アジアで南寄りを流れた。日本周辺では、寒帯前線ジェット気流の南への蛇行は弱かった。
- ・海面気圧（図13）より、北極海～北欧、オホーツク海～ベーリング海、太平洋中部～北米～大西洋西部で正偏差となった。西シベリア～日本周辺では負偏差となった。
- ・850hPa 気温（図14）は、ユーラシアは西シベリア北部と北極海沿岸を除き広く正偏差で、太平洋北西部も正偏差となった。一方、バレンツ海では負偏差となった。
- ・30hPa 高度より、成層圏循環は夏循環に移行した。

南半球の循環

- ・500hPa 高度は、高緯度で負偏差、中緯度の広い範囲で正偏差となった。
- ・海面気圧は、概ね 500hPa 高度に対応した偏差パターンとなった。

帯状平均場

- ・帯状平均した対流圏の東西風は、両半球の緯度 60 度帯で西風偏差、緯度 30 度帯で東風偏差となった。
- ・帯状平均した対流圏の気温は、広い範囲で高温偏差となった。

北半球の積雪と海氷

- ・衛星観測による北半球の積雪日数は、ロシア西部～西シベリア南部で平年と比べて少なかった。
- ・北極域の海氷面積は、4月としては1979年以降で9番目に少なく、特にバレンツ海やオホーツク海で平年と比べて少なかった（[米国雪氷データセンター](#)）。

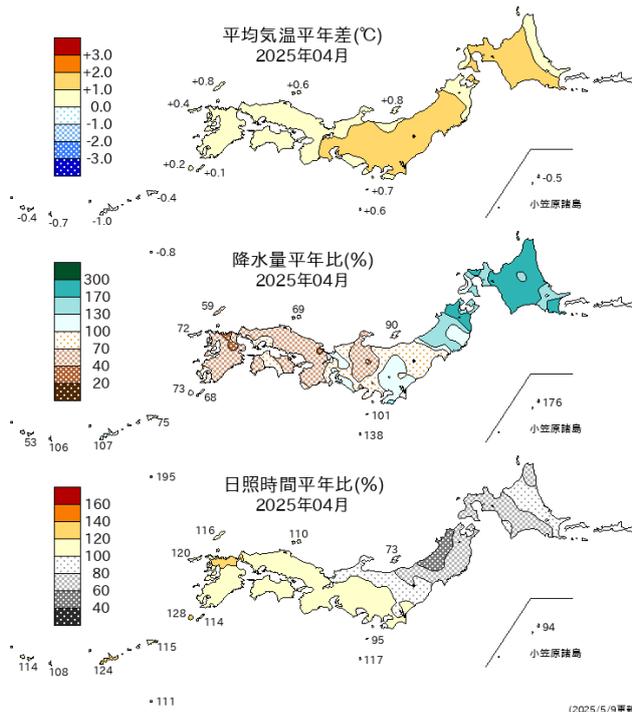


図1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の平年差(比)
(2025年4月)
平年値は1991~2020年の平均値。

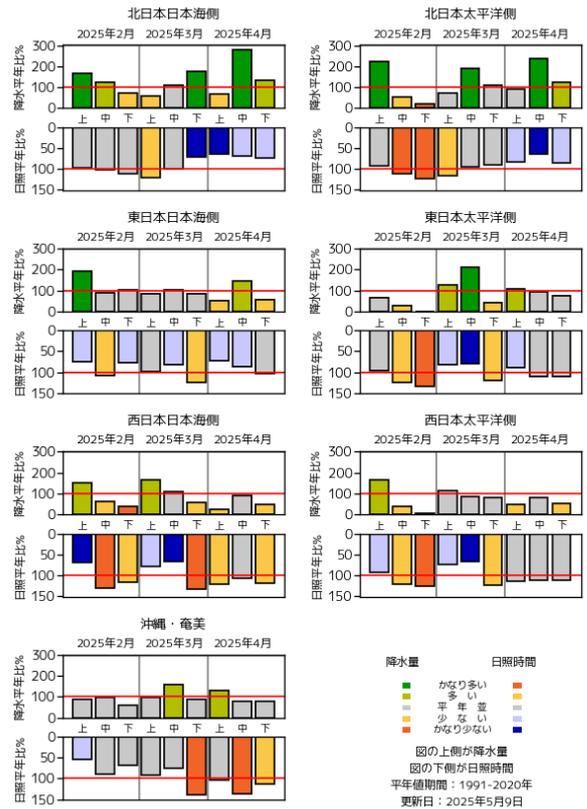


図2 旬降水量及び旬間日照時間地域平均平年比の時系列(2025年2月~2025年4月)
それぞれの上側が降水量(%),下側が日照時間(%).
平年値は1991~2020年の平均値。

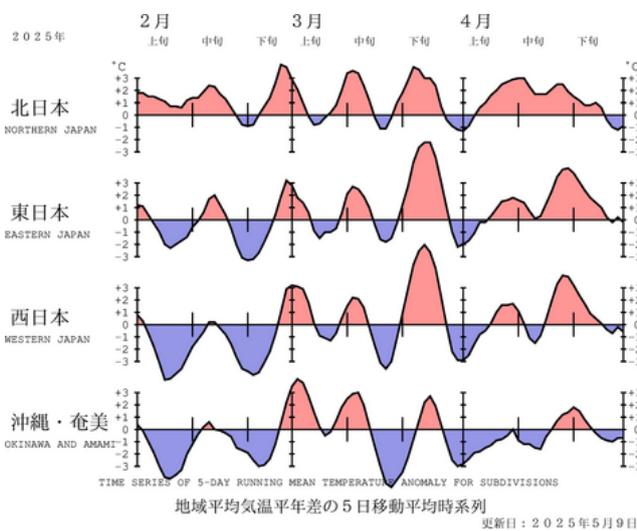


図3 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列
(2025年2月~2025年4月)
平年値は1991~2020年の平均値。

表1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の地域平均平年差(比)(2025年4月)
平年値は1991~2020年の平均値。

地域平均平年差(比)と階級 2025年04月

	気温 平年差 ℃(階級)	降水量 平年比 %(階級)	日照時間 平年比 %(階級)
北日本	+1.2 (+)	160 (+)* 日 167 (+)* 太 154 (+)*	74 (-)* 日 69 (-)* 太 78 (-)*
東日本	+1.1 (+)	90 (0) 日 82 (-) 太 93 (0)	100 (0) 日 88 (-) 太 103 (0)
西日本	+0.6 (+)	58 (-)* 日 55 (-)* 太 60 (-)*	114 (+) 日 115 (+) 太 112 (+)
沖縄・奄美	-0.6 (-)	93 (0)	119 (+)

階級表示

(-):低い(少ない)、(0):平年並、(+):高い(多い)、
(*)は、かなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を
表す。

地域表示

日:日本海側、太:太平洋側

本文中の北・東・西日本の降水量・日照時間の特徴は、
日本海側・太平洋側の階級に基づいて記述している。

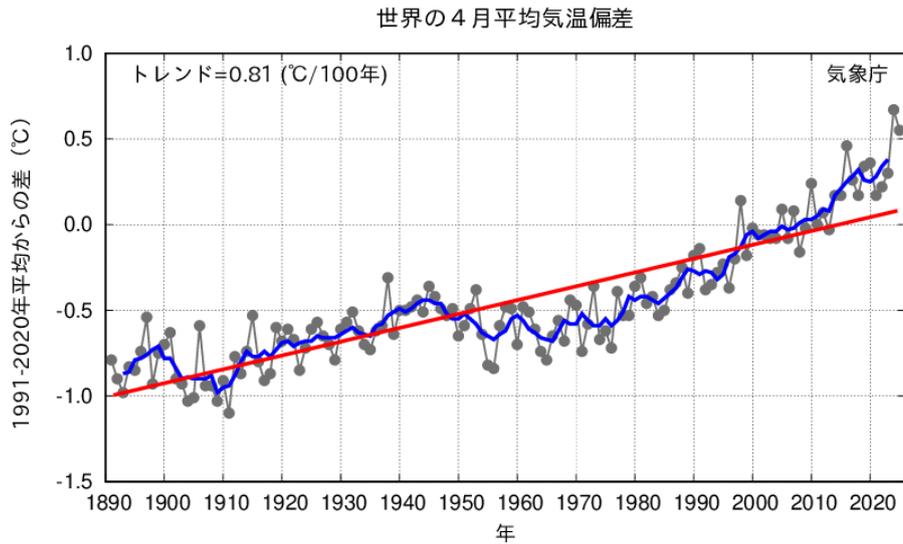


図4 4月の世界の月平均気温偏差の経年変化 (1891~2025年:速報値)
細線(黒):各年の平均気温の基準値からの偏差、太線(青):偏差の5年移動平均値、直線(赤):長期変化傾向。
基準値は1991~2020年の平均値。

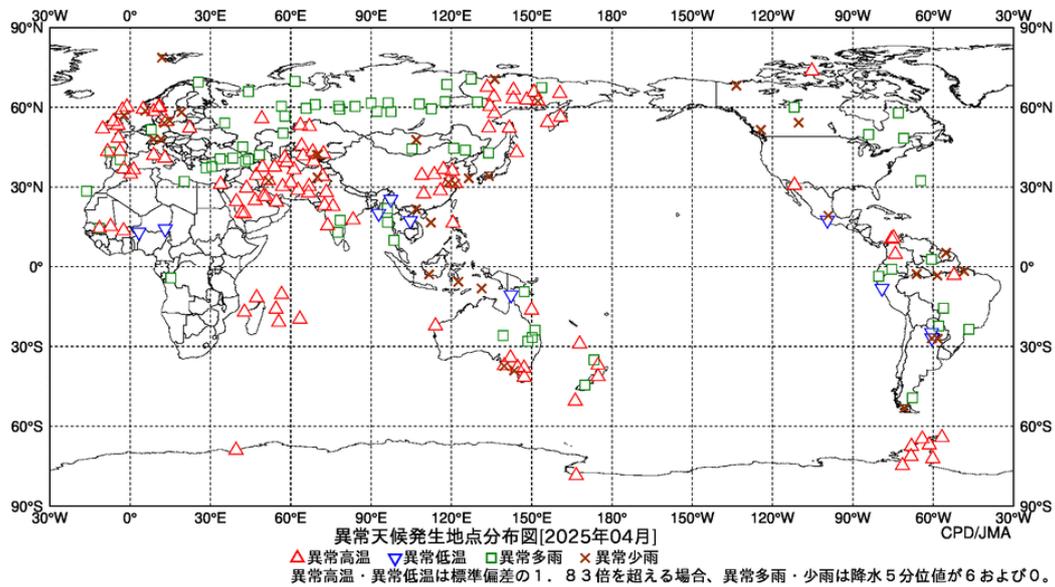


図5 異常天候発生地点分布図 (2025年4月)
▲: 異常高温 ▼: 異常低温 □: 異常多雨 ×: 異常少雨

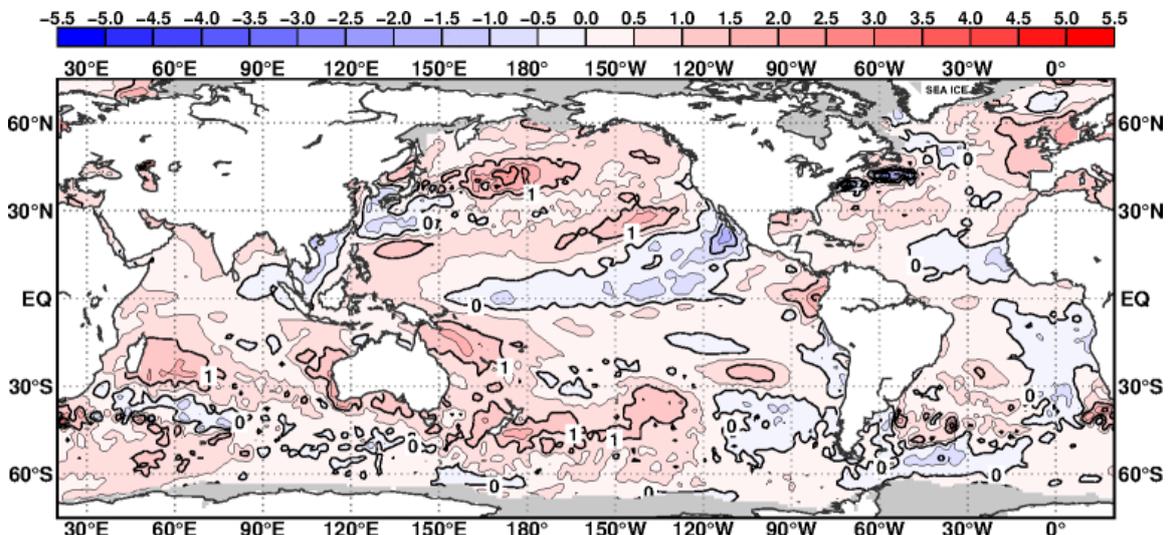


図6 月平均海面水温年差 (2025年4月)
等値線の間隔は0.5°C毎。灰色陰影は海水域を表す。平年値は1991~2020年の平均値。

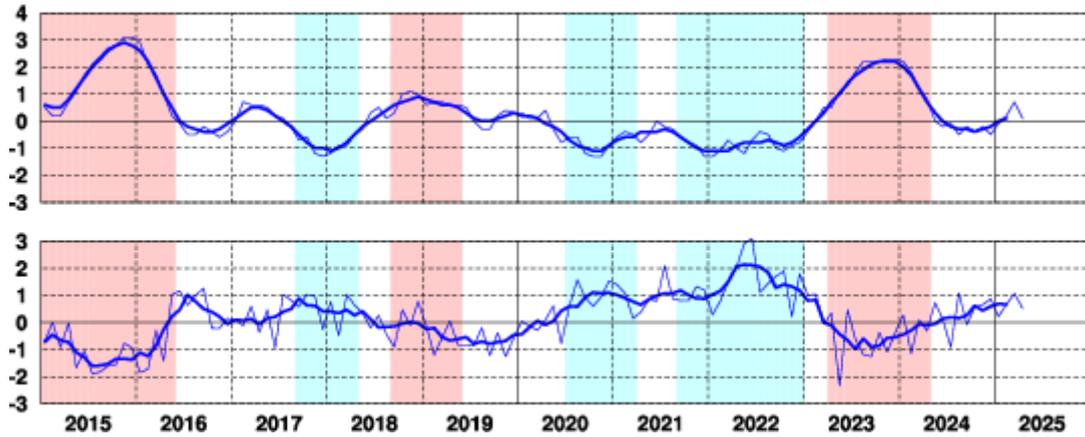


図 7 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差(°C) (上)と南方振動指数(下)の推移
 細線は月平均値、太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の平年値は1991~2020年の平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

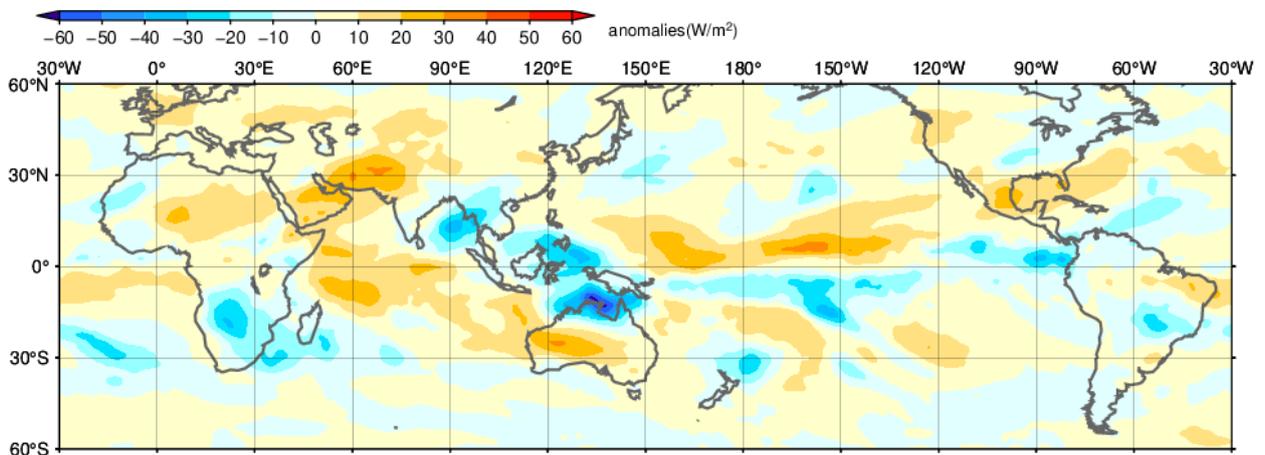


図 8 月平均外向き長波放射量(OLR)平年差(2025年4月)
 陰影の間隔は10W/m²毎。平年値は1991~2020年の平均値。米国海洋大気庁(NOAA)気候予測センター(CPC)より提供されたBlended OLRを用いて作成。

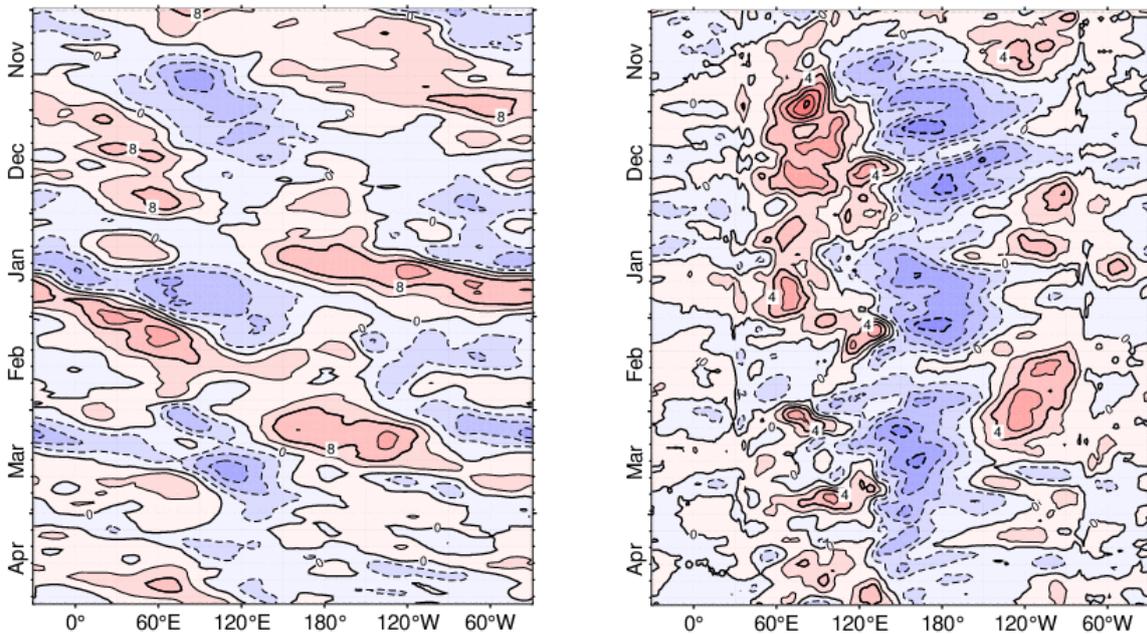


図 9 赤道付近(5°N~5°S)の5日移動平均200hPa速度ポテンシャル平年差(左)、850hPa東西風平年差(右)の時間・経度断面図(2024年11月~2025年4月)
 等値線の間隔は、 $4 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 毎(左)、 2 m/s 毎(右)。平年値は1991~2020年の平均値。

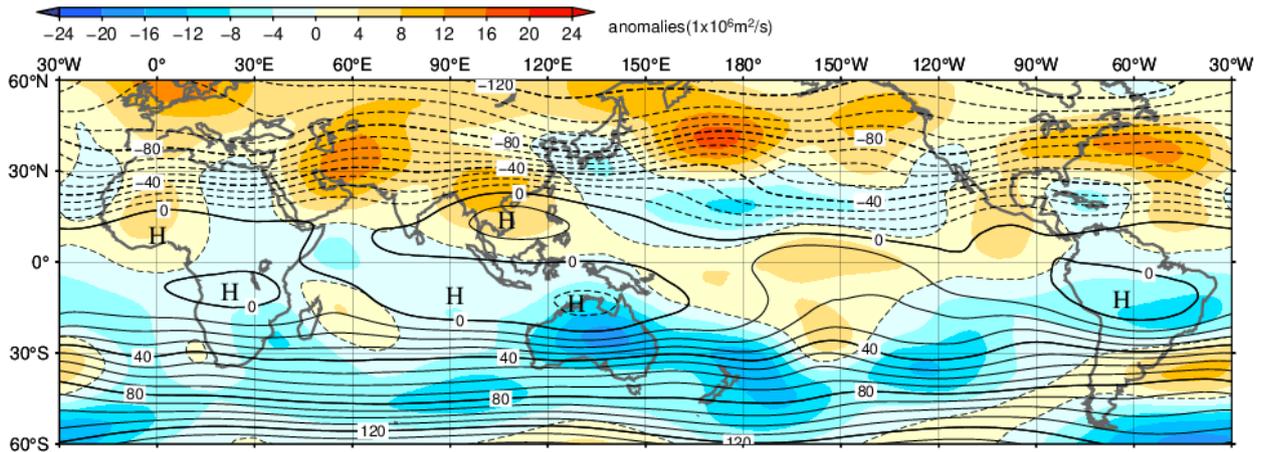


図10 月平均200hPa流線関数・平年差(2025年4月)
等値線の間隔は $10 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

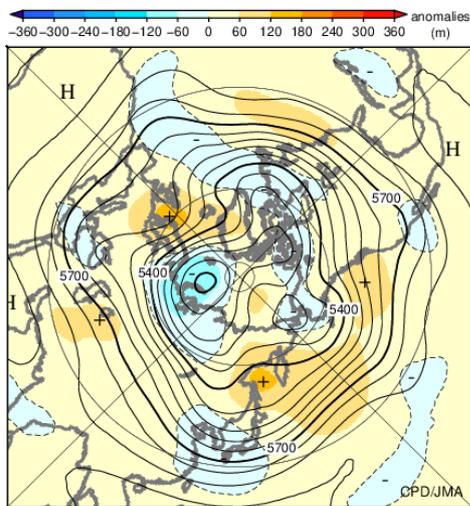


図11 北半球月平均500hPa高度・平年差(2025年4月)
等値線の間隔は60m毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

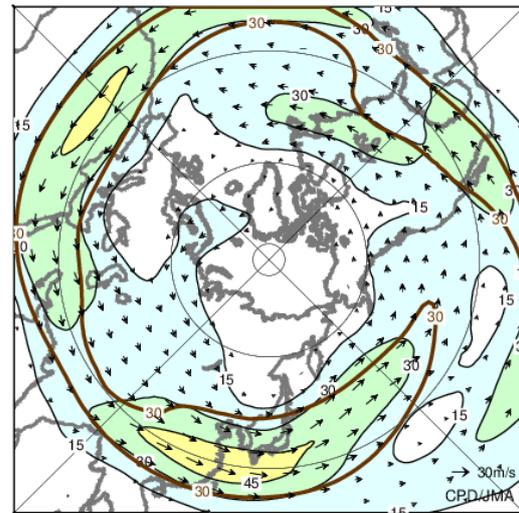


図12 北半球月平均200hPa風速・風ベクトル(2025年4月)
等値線の間隔は15m/s毎。平年の30m/s毎の等値線を茶色で表す。平年値は1991~2020年の平均値。

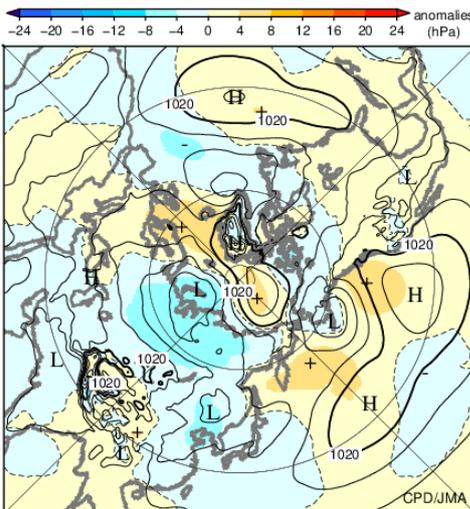


図13 北半球月平均海面気圧・平年差(2025年4月)
等値線の間隔は4hPa毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

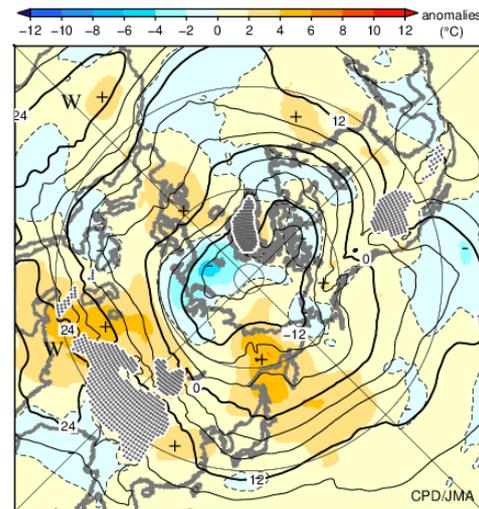


図14 北半球月平均850hPa気温・平年差(2025年4月)
等値線の間隔は4°C毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

気候系に関する詳細な情報は、気象庁ホームページ内「気候変動ポータル」の「最近の気候と海洋に関する情報」の各項目に掲載しています。気象庁ホームページ内の「気候変動ポータル」のURLは次の通りです。

<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/menu/index.html>



本件に関する問い合わせ先：気象庁 大気海洋部 気候情報課

【気候変動ポータル】